

大橋めぐみ作 「神戸で見つけたニャーライフ」

<登場人物>

○和泉紀子(51)：倉澤佳代 ○和泉広江(82)：平本保子  
○森田今日子(51)：大橋めぐみ ○森田浩平(29)：東 裕之 ○河井牧師(76)：小川政弘  
○学生1：宮本正勝 ○学生2：村田泉 ○学生3、テレビ音声：畠山裕樹

テレビ音声 「次に各地の話題です。阪神淡路大震災から28年。1月17日を1週間後に控えた、ここ、兵庫県神戸市では、町のあちらこちらで追悼行事などの準備が進められています」(F.O.)

SE 猫の鈴の音

紀子 「もう…ソラちゃん。スーツケースから出てちょうだい。お洋服が入れられませんよ」

ソラ (鳴き声)

M IN ---- BG

ソラN 「吾輩はネコ様である。名前はソラと言うらしい。子猫の時にこの和泉家に来てやって4年目になるイケメンキジトラ男子である。この和泉家は、オトウチャンとオカアチャン、吾輩の最初のしもべである大学生の七海、そして去年から一緒に住むようになった、おやつ係のオバアチャンの4人家族だ。今日はオカアチャンがスーツケースとかいう秘密基地を作っていたのできっそく住み心地をチェックしてやったのだが…」

紀子 「さ、ソラちゃん…どいてね(よいしょと持ち上げてどかす)」

ソラ 「あ！おいこら、何をする！」

紀子 「お義母さんすみません。ちょっとソラをお願いします」

広江 「はいはい。じゃあソラちゃんはオバアチャンとおやつにしましょ。はいどうぞ」

ソラ (鳴き声)

広江 「そのお友だちと会うのは何年ぶりなの？」

紀子 「10年ぶりくらいかしら。大学の同期なので昔はたまに同窓会で会ってたんですが、最近は年賀状だけで。卒業して神戸の実家に戻ってすぐに結婚して、男の子がいるんですけど、まだ小さいときにご主人が…震災で亡くなったんですよ」

広江 「まあ…大変ね。そのあとは女手ひとつで？」

紀子 「ええ。もうお子さん30手前くらいかしら。大学出られて、会社名ちょっと忘れちゃったけど、大手にお勤めになっていたと思います」

広江 「がんばったのねえ」

紀子 「すみません、一応4日ほどの予定ですが、いろいろよろしくをお願いします。ソラちゃんも

ちゃんとオバアチャンの言うこときいて、いい子にしてくださいね」

ソラ (鳴き声)

M F.O.

(新幹線の改札まわりの音、雑踏)

今日子 「のりちゃん！」

紀子 「今日子！良かった、分からなかったらどうしようかと」

今日子 「そんなわけないって。いや～懐かしいわ～。神戸にようこそ」

紀子 「お招きありがとうございます。今日子あんまり変わってないね」

今日子 「大人になったらそんなに変わらんって。浩平が車で待ってるから行こう」

(大通りの車の音など)

浩平 「こんにちは、初めまして。息子の浩平です。母がお世話になってます」

紀子 「こんにちは。和泉です。前に年賀状の写真で見ていたから、初めましてっていうより  
お久しぶりって感じだけど、ずいぶん大きくなって…って、大人に対して失礼ねえ」

今日子 「最後に年賀状の写真に写ってるの中学生の時やからね」

浩平 「まだ二十代なのに、もう家じゃおっさん扱いですよ」

全員 (笑う)

(車の走行音※車内)

紀子 「浩平さんは、わざわざお仕事休んで来てくださったの？」

浩平 「いえ、実は年末で退職したんです」

紀子 「え？」

浩平 「神学校に行こうと思って。いま準備中です」

紀子 「しんがっこう？」

今日子 「“しん”は“神”って書くんやけど、教会の牧師とかになる勉強する学校のこと」

浩平 「学校といっても、僕みたいに社会人を経験してから入学したり、経営していた会社をたたんで入ってこられる方もいて、老若男女いろいろな経歴の方がいらっしゃいます」

紀子 「そういう学校があるのね。そういえば今日子、同窓会のときに、教会に行ってるって言ったわよね」

今日子 「すごい。覚えてた？」

紀子 「大学生の娘がね、2～3年前から友達に誘われて行ってるのよ。それでなんとなく思い出したっていうか」

今日子 「そうなんや。のりちゃんは行かへんの？」

紀子 「うーん、義理の母と同居を決めるときにクリスチャンの方に良いアドバイスもらって助けて  
いただいたりしたから、すごく興味はあるんだけど、今のところクリスチャンになるつもり  
はないのに行くのも、なんだか気が引けるのよね」

今日子 「気にしなくていいのに。あ、でも今度の日曜はうちらと一緒に教会行ける？」

紀子 「ええ、もちろん」

浩平 「小さなチャペルですが、僕が春から行きたいと思ってる学校の敷地の中にあって、牧師先生  
が校長です。震災後に整備し直された中庭なんかはとてもきれいなんです」

(車の走行音大きくなって F.O.)

M オルガンの後奏 (っぼい音楽)

(礼拝終わりのガヤ)

今日子 「のりちゃん、礼拝どうやった？」

紀子 「なんか失礼なことしてないかって緊張したわ」

今日子 「大丈夫って。隣の建物の1階に食堂があるから、ご飯食べにいこう。結構おいしいよ。」

紀子 「教会に食堂があるの??」

浩平 「神学校の寮の食堂なんですよ。日曜の昼は寮生がいないので教会で使えるんです」

(食堂内のガヤ、食器の音や、椅子を引く音など)

紀子 「ごちそうさまでした。おいしかったわ」

今日子 「良かった。浩平、悪いけどお茶のおかわりもらってきて」

浩平 「いいよ」

今日子 「ありがとう」

河井牧師 「おはようございます。森田さん」

今日子 「先生！おはようございます」

紀子 「おはようございます。お邪魔しております」

今日子 「あ、彼女、大学の同級生の和泉紀子さんです」

紀子 「和泉です。今日はお世話になりました…」

河井牧師 「牧師の河井です。はじめまして」

(椅子を引き、座る音)

河井牧師 「神戸にお住まいですか」

紀子 「私は東京なんです。彼女とはずっと年賀状に“久々に会いたいねー”って書いてたんですが、  
やっとお互いの予定も合って実現しました。神戸は思ってた通り、きれいな街ですね」

河井牧師 「そうでしたか。神戸も外から見ると震災のことがわからないくらいきれいになりましたね。

この敷地内には当時の建物が少し残っていますが。場所が良かったのか、建物の造りが良かったのか、建物自体の被害は少なかったんです」

紀子 「先生もこちらで被災されたんですか」

河井牧師 「ええ。この時期になると、やはりいろいろ思い出しますねえ。来週でもう 28 年とは…早いものです。来週、17 日には近隣の方も招いて記念の礼拝をいたします」

今日子 「先生ったらそこで私に体験談をお願いしますって。教会以外の方もいらっしゃるし、何をどう話せばいいか、もうめちゃくちゃ悩んでるよ」

浩平 「はい、お茶。先生どうぞ」

河井牧師 「ありがとう。（一口飲んで）私はね、当時を思い出すと、今日子さんにしか語れないことが必ずあると思っているんですよ」

## M ブリッジ

テレビ音声 （ヘリの音など）

「神戸市の上空です。午前 5 時 46 分に神戸市を中心とする大きな地震が発生しました。上空からは倒壊したビルや家屋が無数に確認できます。あちらこちらで火災が発生しており、黒煙が立ち込めています。まだ救助活動などが行われている様子は確認できません」

河井牧師（49 歳） 「全員いますか！？ 寮長、部屋に残っている人たちの確認をお願いします」

学生 1 「いま全員きました！」

学生 2 「大きなけがをした者はいません」

河井牧師 「私は、近所のお宅は大丈夫かと外に出てみました。数十メートル先の学校のグラウンドの辺りに断層があったのだと後で知りましたが、そこから向こうは急に空が開けていました。昨日そこにあったはずのものが無い。至る所で炎や黒煙が上がっている。上空を飛び交うヘリコプターの音、がれきが思い出したように崩れる音、時々繰り返すような余震に上がる悲鳴。体験した者は一生忘れることはないと思います。戦争映画のワンシーンでも見ているかのように、実感がまったくわきませんでした」

学生 3 「先生。寮は部屋の中はぐちゃぐちゃですが今のところ建物は無事に見えます。」

学生 2 「1 階廊下の窓ガラスが何枚か割れました。」

学生 1 「電気はつきませんが水はでます！」

河井牧師 「そうですか！ガスはどうでしょう」

学生 1 （オフで） 「大丈夫です！」

河井牧師 「ありがとう。ではここを開放して、ご近所のお手伝いをさせていただきます。誰か炊き出しのリーダーをお願いします。それから誰か寮にある予備の毛布やタオル、常備薬などをかき集めて管理をしてください。寮のお風呂も開放します。誰か時間割の管理を担当してくれますか。手の空いた方は、ご近所への声かけを手分けして…。外を歩くときは

十分に気を付けて二人一組で行動してください。とにかくやれることをやりましょう」

今日子 「うちもこの並びやったから家が倒壊とまではいかなかったけど、主人は地域の消防団の人たちと出かけたっきり戻らなくて…ちっちゃかった浩平はずっと泣いてるし。二日目くらいに私ストレスですごい熱出してねえ」

今日子 「あの…すみません」

学生1 「はい。何かお手伝いできることはありますか」

今日子 「すみません、あの…今朝から熱があつて…解熱剤とかないでしょうか」

学生2 「どうぞこちらにかけてお待ちください。今お持ちします。お食事はされてますか？ 何かお腹に入れたほうがいいと思うので、おにぎりだけですよろしければ、待ってる間に召し上がっててください。ちょっと行ってきます」

今日子 「はい……（涙ぐむ）ありがとうございます」（泣き出す）

今日子 「なんか後から思うと、ものすごく張りつめてたんやなーって。ここに来て、本当に心配してくれる人たちに出会えて、気がついたらわーわー泣いてた。1週間くらいして、主人が亡くなったことが分かったときは、反対にしばらく現実と夢の間を行ったり来たりしてる感じで、ぼーっとしてた」

今日子 「河井先生。“生きてる”ってどういうことなんでしょう。“いのち”って何ですか。自分のものなのに、自分でどうにもできないって“生きてる”って言えるんですか。何かに生かされてる？ 私、なんで生きてるんでしょう」

河井牧師 「あの頃、そんなふうに悩まれている方が何人もいらっしゃいましたね。相談に来られたり、礼拝に来てメッセージを聞いていかれたりするご近所さんもいらっしゃいました」

河井牧師（メッセージ）

「自分の人生を自分でどうすることもできない。それはとても苦しい人生です。自分がどこにいるのかも分からず、いえゴールさえ知らずにマラソンをしているようなものです。手をとってゴールへ導こうとされている神様に背中をむけて、思い思いの道、自分中心の思いや、様々な欲に引き寄せられて進んでいるのです。このような思いを聖書では“罪”と呼んで、その中を走る私たちは罪の中に死んでいると表現しています。

ところが聖書にはこうも書かれています。

“しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。”（エペソ人への手紙 2章 4～5節）（F.O.）

今日子 「そんな話初めてきいたけど、真っ暗な心の中にすーっと光が差し込んできたみたいなの、そんな気持ちになったわ。『神さまは、罪の中に死んでる私たちを救い出すため、ご自分のひとり子、イエスを人間としてこの世に送り、人間の罪をすべて負わせて、十字架の上でその罪に対する罰まで負わせられた。それによって私たちに“キリストとともに生きる道”が開かれた。罪人である私たちが、ひとり子のいのちさえくださった神さまの愛によって生かされ、造り変えられ、“新しい生き方”という希望をいただくことができる』…って」

紀子 「新しい生き方…」

今日子 「そこで劇的に立ち直ったわけじゃないけど、生きるって、一人で闇雲にがんばるんやなくて、神さまと一緒になんやって分かったら、前を向こうって思えたっていうか、しんどくても感謝なことたくさんあるって気づいたっていうか。肩の荷が降りたっていうか」

河井牧師 「今日子さん、そんな感じで来週も話されたら良いと思いますよ。何か特別に良い話をしてください、というのではなく。あの悲惨な状況の中で、人生の意味を求め、神さまに出会って新しい生き方を見つけられた。今日子さんだからこそ語れることがあるのではないですか」

今日子 「そうですね。今いろいろ思い出させてもらって、私も、なんだか話したくなってきました」

紀子 「来週の月曜日よね…私も今日子の話、聞きたかったわ」

浩平 「たぶんビデオを撮ると思うので、送りますよ」

今日子 「え、ちょっと、ビデオはやめてよ。恥ずかしい！」

浩平 「永久保存版にするから」

今日子 「えええ・・・」

河井牧師 「はは・・・浩平君、よろしく頼みますね。それでは私はこれで」

(椅子を引く音)

浩平 「はい、先生」

紀子 「ニュースで見ているだけじゃ、本当に分からないことばかりだったわ。大変なんだなって頭で分かってはいても、心の中は想像もできないし」

今日子 「同窓会で会っても、こういう話はしないしねえ。実は、家でもあまりしない」

紀子 「え？ そうなの？」

浩平 「震災の時の話はしないですね。僕自身、ほとんど覚えてないので聞きたいと思うことはありました。でも、その時に神さまと出会った母のおかげで、僕も神さまと出会えたり、一番大事なことを教わってきたと思うので、(今日子に)感謝してます!!」

今日子 「うわぁ…なにそれ恥ずかしい」

紀子 「一番だいじなこと？」

浩平 「イエスさまと一緒に歩く人生ってことです。」

(新幹線の通過音、警笛…的なものあれば)

(お茶を注ぐ音)

紀子 「お義母さん、お茶入りました。いろいろと家のことありがとうございました」  
広江 「どういたしまして。ソラちゃんもいい子にしてみましたよ。ね？」  
ソラ 「もちろんだ！毎日パトロールも忘れなかったぞ！」

M IN ---- BG

広江 「神戸はどうだったの」  
紀子 「友だちも息子さんも元気で良かったです。街も素敵でしたけど、今でも震災が終わってなくて、いろいろな思いがあるんだなって感じました。でもその中でも、すごく大事なことを教えてもらった気がします」  
広江 「あら、何か良いことでもあったのかしら」  
紀子 「ちょっとうまく言えないんですけど、彼女は震災のあとの人生で、生きる指針っていうのかとても大事なことを見つけて、迷わずに生きているなって感じたんです。彼女の教会の先生のお話を聞いて、私もちょっと教会に行ってみたくなったっていうか。今度、七海に連れていってもらおうかと思っていますところです」  
ソラ 「オカアチャンも教会に行くのか。そういえば七海が初めて教会に行くとき、めちゃくちゃテンション上がったよな」

七海 (前々作の音声)

「ソラ～、あした七海ちゃんは教会デビューになりました♪ お留守番、よろしくね！」

ソラ 「教会ってそんなにいいところなのか？ うまいカリカリが食べられるとか…？ いや、オカアチャンや七海はカリカリが好きじゃない。まあ吾輩には人間の考えてることは分からないが、生きるためにそれが大事だっていうなら、たまには留守を守ってやらんこともない。人間の人生には、きっと、カリカリよりも大事な大事なものがあるってことさ」

M F.O.

(END)

